平成２年度赤潮貝毒監視事業

播磨灘南部域赤潮調査（抄録）

大塚　弘之・吉田　正雄・萩平　　将

本事業は,瀬戸内海関係 12 府県が参加し,赤潮発生予察手法の確立を図るとともに,漁業被害の未然防止と軽減対策の一助を目的として昭和 51 年度より継続中のものである。

平成 2 年度の播磨灘における気象,海象およびプランクトンの出現状況について取りまとめたのでここに報告する。なお,他府県の調査結果を含めた詳細については,平成２年度赤潮貝毒監視事業報告書(瀬戸内海ブロック）を参照されたい。

1　気　　象

気温は,平年値よりかなり高く推移することが多く,降水量は少なかった。日照時間は,平年値を上回ることが多かった。また,日平均風速は, 7 月上旬および 8 月下旬に 6m／sec 以上の風を記録したが,それ以外の時期は,比較的風が弱く推移した。

2　海　　象

水温が 20℃を超えた時期は例年と変わらなかったものの,7 月中旬以降,表層水温が急激に上昇し,水温成層が発達した。水温成層は,8 月中旬まで大きく崩れることなく維持された。このため,栄養塩は,表層付近では例年より低いレベルで推移することが多く,特に DIN は,検出限界以下にまで減少することがあった。塩分は,全般に例年よりやや低く推移したが,調査期間中は大きな変動はみられなかった。

3　プランクトン

Chattonella は,7 月中旬以降,濃縮試料からわずかに検出されたものの,1cells／mℓを超えることなく終息した。他のプランクトンでは,珪藻が優占することが多かったが,最高出現数は,例年よりやや少なかった。これは,表層付近の栄養塩が低レベルで推移したことが原因であると考えられた。また,ネットプランクトンの沈澱量は,例年より少なく推移することが多く,Doliolum の出現がみられた以外の時期は,珪藻の出現数とほぼ対応した。